

ユニバーシアド報告書

東北大学卒業 田邊拓也

はじめに、私は当初ユニバーシアドに行くことに対して強い気持ちを持ってはいませんでした。4年生が終わった時点で競技(オリエンテーリングを向上させ、競うこと)を辞めるつもりだったからです。推薦により選考されたのは相性のいいテライン、相性のいいコース、他の選手の不調などいろいろな運が重なったことが要因でしょう。

1、経緯

大西さんから出場する権利を得た旨の報告を受けたとき、私のように今後の競技力向上を志さない者が選考されてよいものかを迷いました。そのため選考を受ける旨を連絡した後に吉田コーチからいただいた言葉には救われました。私の大きなモチベーションとなったのは競技を通じて海外の選手と触れ合うことが自身の成長に繋がるのではないかと考えたことにあります。お互いに違う言語を話す人と人がどのように繋がれるのかを試してみたかったのです。

2、トレーニング

インカレが大きなモチベーションとなっていた現役時代の私は怪我を恐れてトレーニングの内容を変えることが出来ず、空いた時間を使って1日1~2回の20分前後のジョグを行っていました。3月からは思い切って平日は一切トレーニングを行わず、毎週土曜日に1km 3,15~20 rest 200m 70sec×5のインターバル走を行いました。月間走行距離は50kmに満たないのですが、このトレーニングで十分に身体能力の向上を感じられたのでユニバーシアド選考後も内容は変えていません。5月中旬にハーフマラソンに出場し、膝を壊してしまったため、トレーニングは週末のオリエンテーリングのみとなりました。

3、出国まで

実験や帰国後の課題など研究室の予定を前倒しで行う必要があり、週末はオリエンテーリングに充てるような生活であったためオリエンテーリングについて考える時間は多くなく、出国の準備も慌ただしいものでした。

4、現地にて

本戦の5日前に現地入りし、はじめは暑さ・生活リズム・時差にからだを慣らし、地図を使って初めてオリエンテーリングを行ったのは3日目でした。この際に視界の悪い場所を通過するレグはほとんど上手いかず、本戦は明瞭なラインを丁寧にサムリーディングして進むことに決めました。プレイベントのレースでは平たい場所でのスピードは衰えていないことを実感出来、あわよくば海外の速い選手を追走して走りを見ようということは常に考えていました。オリエンテーリングとは関係ないですが慌ただしい

日常から逃れ、異国での貴重な体験を重ねる日々は楽しくてしょうがなかったです。

5、本戦

5-1、ロング

トレキャンで若干熱中症気味になったため、ロングの目標は競技時間内の完走。自分の実力でも辿れそうなルートをしっかり読んでサムリーディングを外さないことを意識して走りました。アタックが雑でロスしたレッグがいくつかとチェコの選手を追走し損ねて現在地を失ったレッグがありましたが、同じコントロールを 3 回通過するループ区間のショートレッグはスピード感を持っていい感触でこなせました。最後は海外の選手を追走しながら体力ギリギリでゴールしました。自己採点では 65 点です。

5-2、ミドル

スピードの出る区間が多そうなテラインだったのでミドルの目標は一人の時は自分の現在地を外れないルート取りをし、自分よりスピードのある海外の選手に出会ったら行けるところまで追走すること。この際に走るだけだったら海外の選手について行くことは十分に可能であることが実感出来ました。この際に膝をぶつけて出血し、現地で医療スタッフに 3 針縫われる怪我をしました。この日の走りは追走出来たことそのものに 70 点です。

5-3、リレー

尾崎－結城－田邊のチームで 3 走を走りました。前日に医師に出走を止められたものの強行して出場しました。実際歩いていても若干痛むような状況だったので目標は完走することです。怪我の如何とは関係なく、細かな手続きを怠ってのミスを連発しました。レース内容は 30 点ですが、一緒に走ってくれた仲間たちに何よりも感謝したいです。

6、国際交流

多少強引にでもキッカケを作って他国の選手に積極的に話しかけることを意識していました。英語力には全く自信がなく、実際話が噛み合わなかったり、言葉が詰まってしまったり焦ることも多々ありましたが、相手と繋がろうとする態度と気持ちを伝える表情が重要だと思いました。日本では英語は世界と繋がる能力の一つとして学校教育で評価するものなので、日本人には自分の英語能力が相手と比べて劣っているとそれだけで気後れしてしまいがちな人が多く、自分も例に漏れずそういうところがあります。そのため他国の選手とは対等な目線で、お互いに違う言葉話す人という意識で向き合うことを強く意識しました。日本語はもちろん英語も通じない子供に日本語を教えたり、日本の応援(東北大学)で他国の選手と盛り上がったたりして、すごく楽しめました。吉田コーチ

からもバンケットは入賞レベルだったとお言葉を頂戴することが出来たので(笑)、国際交流に関しては85点です(^^)。しかし今回は「会話」は出来なかったと思いました。英語が堪能な星野さんや尾崎くんのように対等な言語レベルで話し、冗談を理解したり、興味を持ったことを質問したり出来るようになりたいと思うようになりました。

7、今後について

競技として取り組むのは辞めます。理由は、オリエンテーリングは自身がこれまでで最も真剣に取り組んできたことの一つであり、これから気持ちを込めて練習するほどの目標もなく続けるそれは、自分の中では競技ではないからです。

8、感想

選考された当初からこれで競技を終わりにしようと考えていた自分が結果にこだわったレースが出来たかと問われれば素直に首を縦に振ることは出来ません。自身のレース内容に不満はありませんし、悔しいと感じることもありませんでした。それでも大西さんから連絡をいただいたときに自分はオリエンテーリングの日本の代表としてふさわしい人間でない、などと決めつけなくて本当によかったと今になって思います。日本の選手たちからはオリエンテーリングに向き合う真摯な姿勢を感じられ、刺激を受けました。またオリエンテーリングという競技の魅力、そして言葉の壁を越えて繋がることの出来るスポーツという存在そのものの素晴らしさを再確認することが出来ました。私はこの機会にオリエンテーリングからも、そうでないことからたくさんの学びを得ることが出来ました。最後に、現地まで来ていただいた吉田コーチ、小山さんはじめ代表スタッフの方々、そして短い間でしたが充実した時をともにしたユニバーシアード代表のメンバー、みなさんのおかげで本当に幸福な時間を過ごせました。心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

平成 24 年 8 月 31 日

東北大学卒業 田邊拓也